

論文審査の結果の要旨

氏名 福田 素子

討債鬼故事は、金を奪われたり、借金を踏み倒されたりしたまま死んだ者が、仇の子供に転生し、奪われた額と同じだけ、親の財産を蕩尽することによって、復讐するという物語である。文言小説に多くの作例が残されているほか、「親に苦勞をかける子供は、前世の敵の生まれ変わりである」という観念が、様々な文芸作品に現れており、現在でも広く華人社会に定着している。日本と中国で、歴代の文献に類話を探す研究が行われ、民間故事の分類の中でも取り上げられているが、本格的な研究はほとんど行われていない。

本論は、討債鬼故事に関し、主として次の3点を探求する。①仏教とともに伝来した輪廻という生命観が、中国の復讐譚に取り入れられ、討債鬼故事が生まれるまでの過程、②中唐に成立し、清代まで作例の見える討債鬼故事が、中国社会の中で起こした歴史的变化、③討債鬼故事が日本に伝来した後、日本で作られた作品に生じた変容。

①については、漢代に仏教が伝来する以前から、中国には亡霊復讐譚があり、復讐を正義の実現として肯定していたのに対し、仏教は復讐を否定していたことを示し、仏教では逃れるべきものであった輪廻が復讐の手段と化し、中国の故事に取り入れられるまでの過程を、多くの作品を挙げて詳細に分析した。②については、復讐する者の立場で語られていた討債鬼故事が、子供のために苦勞する親の視点に立った物語へと変化したことに着目し、この変化の転換点となったのは、元末明初の作と推定される雑劇『崔府君断冤家債主』であることを論じた。さらに現在華人社会で、親が子を「討債鬼」と罵ったり、「前世でお前にどれだけ借金があるのだ」と叱ったりすることは、雑劇『崔府君』に始まる変化の延長線上にあることを示した。③については、討債鬼故事を受容して江戸時代に作られた小説と、明治期の落語「もう半分」では、人から預かった金や、娘が身を売って作った金を奪われたため、仇の子に転生して復讐するという話が多く見られることを指摘し、中国ではごく少数の例を除き、自分の金を奪われたことの恨みが復讐の動機となっている点に、日本との違いが明らかであること、故事の変容は、それぞれの社会の家族観・金銭観を反映したものであることを示した。討債鬼故事をめぐってこのような研究が行われたことはかつてなく、着想はいずれもきわめて独創性に富んでいる。

審査委員会では、②に関して、道教儀礼などまだほかにも検討すべき資料があり、歴史的变化に関する考察は、更に深化させる余地があるとの指摘がなされた。しかし本論は、討債鬼故事について多くの新知見を提出するにとどまらず、この故事が中国社会を考察する上で、有効な視点を提供するものであることを初めて示したという点で、その意義はきわめて大きい。よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するものと判断する。